

山上の祭祀遺跡

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 遺跡のあった丘陵（北東から）



写真2 丘陵頂上 手前に磐座とみられる岩、奥に石敷遺構（北から）

1963年、右京区梅ヶ畑^{むこうのち}向ノ地町にある丘陵の工事現場から、弥生時代中期（今から約2000年前）の銅鐸4個が見つかりました。京都市内唯一の銅鐸出土地「梅ヶ畑遺跡」です。

それから34年後の1997年4月、同じ丘陵の北側を削り取る大規模な工事が始まりました。それにもない立会調査を実施したところ、丘陵上に奈良時代から平安時代の祭祀遺跡があることがわかり、引き続き発掘調査を行ないました。

ここは嵯峨野の背後にある丘陵の端に近く、御室川が流れる谷筋を見おろす地点です。丘陵は周囲から約35mの比高差があり、険しい斜面となっています（写真1）。

祭祀の遺構 丘陵の頂上は全体が平らに整地されており、北側には高さ50cmの岩を中心とする平坦面、中央にやや高められた段、また南には楕円形の高まり、という三段の祭壇状の遺構を検出しました（写真2）。この岩のある北の平坦面と中央部の間では柱跡や焼土を発見しました。南の高まりの中央には30～50cmの石を敷きつめた遺構があります。東側には斜面を削ってテラス状の遺構が造られていました。また、西と北東の斜面では、多量の遺物が出土しました。これは頂上で行なわれた祭祀の時に用いられたものが周囲に捨



写真3 「拱手如来座像」線刻石片



写真4 「□寺」墨書土器



写真5 「秦」墨書土器



写真6 二彩陶器

てられたのでしょう。頂上の北の小さな岩は神の依り代（磐座）とみられます。この丘陵では奈良時代中頃から平安時代前期にかけて、断続的に祭祀が行なわれたと考えられます。

出土した遺物 この遺跡から出土した遺物には、奈良時代中頃から平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・二彩陶器・瓦・銅銭・鉄釘・石製品・砥石など多種多様なものがありました。

なかでも注目されるのは、二彩陶器（写真6）が多いことと、須恵器の瓶子が完全な形で多量に出土したことです。銅銭は石敷遺構にともなって出土し、皇朝十二銭のうち和銅開珎など五種がありました。興味深い遺物としては、細い線で仏（拱手如来座像）を刻んだ石片（写真3）があります。

また、墨書土器には「□寺」や

「秦」の字（写真4・5）がみえます。この線刻の仏や「□寺」は仏教的な要素が、「秦」からは嵯峨野に勢力を持っていた秦氏との関連が想像されます。

この遺跡がどのような、また何

のための祭祀遺跡であったのか、検討しなければならない点が多くありますが、平安京遷都前後の嵯峨野の歴史的な様子を知るうえで重要な遺跡です。

（高橋 潔）



祭祀遺跡の位置とその周辺